

虚を致すこと極まり、静を守ること篤し。万物、並び作るも、吾は
以て復るを觀る。夫れ物の芸芸たる、各おの其の根に復歸す。根に
歸るを静と曰い、是を命に復すと謂う。命に復するを常と曰い、
常を知るを明と曰う。常を知らざれば、妄作して凶なり。常を
知れば容、容なるは乃ち公なり。公なるは乃ち王、王なるは乃
ち天なり。天なるは乃ち道、道なるは乃ち久し。身、没するも殆
うからず。

【大体の意味内容】身も心も空虚にしてその極致にいたり、深い静けさを篤く守る。そうすれ
ば、万物は盛んに生い茂っているが、同時に、そうした生命燃焼とは根源へ立ち返ってゆく
過程、と觀想できる。そもそも生きとし生けるものは、むんむんと生長しつつ、それぞれの
源へと復歸してゆくものだ。根源への帰還とは、死ではなく「静」である。これは命の源
である黄泉の世界へ帰ることで、「黄泉還り」という。「黄泉還り」することを「常」といい、
永久不変の「常道」にあることを意味する。「常道」を知ingことを「明」、つまりそうした深
い「常識」を明察したという。常道を知らずにいると、輕挙妄動してその結果は凶となる。
永久不変の常道を知れば、些細なことにかまけることなく、おおらかに物事を「包容」でき
る。そうした「容」はすなわち「公平無私」の「公」である。天地間において公平無私を実践
しようとするのが、本来の「王道」でなければならぬ。王たるものは天命を授けられるかど
うかで決まる。天命なくして王たることは適わない。天がすなわち道であり、森羅万象の根本
原理を表徴する。道德は久遠の命脈を保つ。たとえ現実の身体が滅びても、道の王なる

威徳は、永遠不滅である。

種から萌え出た芽が生長して若木となり、長い年月をかけて無数の葉を茂らせ花を咲かせる。やがてその花や葉は散って土へ還る。散った彼らは死んだのではなく、別の力となってほかの生命を支えます。また裸になった樹木は死んだように静まり返っていますが、決して死んだのではなく、外見は静かですが、内部では烈しく、新しい生命を生み出す準備で忙しい。次の若葉や花、花粉や胚珠などを作るエネルギーを蓄えているのです。

冬の寒さが厳しいほど、春の桜は美しいといいますが、厳寒のヤマを過ぎる頃に剥いだやぐらの樹皮を煮詰めて布を染色すると、それはえも言われぬほど美しい、上気したようなピンクに染まると、聞いたことがあります（染色家志村ふくみの著書）。

そのような静の状態も、実は活発な生命活動の流れにおいて、かろうじてバランスが保たれているというわけで、それを「生命の動的平衡」（福岡伸一）といっています。

老子の生命観は、こうした動植物の生の循環から、死と再生の繰り返しが多様なレベルで営まれ、それが「常」を為しているところと洞察した点で、「動的平衡」のアイデアも統合していると思います。さらにもう考えてみるべきではないでしょうか。

老子のいう「天」とは宇（空間）と宙（時間）の統合されたもの、つまり「宇宙」のことである。「道」とはその宇宙の働き。宇宙の万物は一見、機械的な法則で動き、絡まり、反応し、仕組まれているようですが、表面には見えない奥深いところで、何か計り知れない意思のようなものをもって、私たちのような小さな存在とも無意識に交信しあっているのではないかと。どうもそんな感じがしてなりません。

私たち一人一人とも無縁ではない、宇宙全体のありようを、「遊働世界」と呼んでみたいと思います。